

# 表現学習指導の一方法

—「書くこと」と「話すこと」を関連させて—

この文章は、どのようにしたら表現力を着実に伸ばすことができるかを考えているわたしが、「書くこと」と「話すこと」を一つながりのものとして行なった表現学習指導の報告です。

Ⅰでは、どういふわけでこのような方法をとったかということ。Ⅱでは、その方法というのはどんなものかということ。Ⅲでは、そういう方法でやったあとどういふことを考えているかということ。以上のような構想で述べます。

## Ⅰ はじめに

わたしたちのことばの生活で、「読むこと」「聞くこと」を「理解」活動と考えますと、「書くこと」「話すこと」を「表現」活動と考えることができます。「書くこと」と「話すこと」とは表現方法に違いこそあれ、表現に至るまでの思考のプロセス（過程）に違いはありません。ですから、表現力を養うためには、考えることの訓練と、書くこと、話すことに必要な技術の訓練とが大切になります。そして、正しくむだなく話すためには、どうしても書くことが必要になりますから、表現法を自然な順序にすると、考える、書

中 田 康 治

く、話すとなるでしょう。わたしは国語表現法の中に、考える、書く、話すを正しく位置づけながら、関連させて指導したいと思いました。

そこで過去の「書くこと」「話すこと」の実践のなかから、作文・公話に関するものを取り出し、その反省の上にならって目標を設定することにしました。

まず、作文に関するものですが、38年度に行なった作文指導の項目は次の通りです。

## Ⅰ はじめに

## Ⅱ 叙述

## A 題名

B 題名のつけ方

C 書き出し

D 書き出しの例

E 書き終わり

F 書き終わりの例

## Ⅲ 構想

A 話材メモ

## Ⅳ 主題

A 題材集め

B 題材選択

C 主題決定

G 段落

- B アウトライン
- C 構想の型 (I)
- D 構想の型 (2)
- E 文章例
- F 推敲
- G 清書
- H 叙述 (文・語)
- I 叙述 (表記記号)
- J 評価

このときの対象は第三学年で、文章構成を理解させながら、議論文を完成させたのでした。

その学習後に行なったアンケートから大事な点を抜いてみますと

- 1 書きにくい。
  - 2 作文の過程は理解出来るが、書くのは自由がよい。
  - 3 一年生の頃やってほしかった。
  - 4 アウトライン・題材選択のところできづまった。
  - 5 今後作文力を伸ばすために特に次の点に留意したい。
- 自分の表現したいことをはっきりつかむこと  
○ 表現したいことを適確に書くこと

などがあげられます。

自分の課題として次のようなものを残しています。

- 1 このような形式で総合的に扱うとしたら時期はいつがよいか。
- 2 型を意識せず自然に会得させる方法はないか。
- 3 文章の種類に応じて指導方法はどのように変化するか。
- 4 作文完成の各過程における技術の学習化はどのようにすればよいか。
- 5 一斉作文学習における個別指導はどのようにすればよいか。
- 6 作文学習の評価はどうすればよいか。

また、二七会(野地潤家先生にご指導いただいているグループ)で報告したとき、メンバーから次のような助言を得ています。

- 1 目的をはっきりさせ、問題をしぼること。
- 2 導入の段階で、ほんとうに身近な問題を見つめさせ、議論の対象をはっきりさせ、書く目的と必要を明確にさせること。
- 3 一方的に型にはめるのではなく、個人個人の必要に応じて構成法を見せること。

4 どの観点からの評価かを明確にすること。

5 指導のプロセスの全体は指導者の胸に収めていて、そのプロセスを切りとっての練習を積み重ねてゆくこと。

6 取材指導にも責任を持ち、生徒の意見を見つけて育ててやることこそ大事であること。

次に公話に関するものですが、36年度に三分間スピーチを全員にさせたことがあります。そのときのアンケートから要点をとりえてみますと

- 1 やってよかったと思う。(四十三名中四十二名)
  - 2 自分の考えを人前で発表出来る自信がついた。
  - 3 話すだけでなく、聞くことも大切だということを感じさせられた。
  - 4 人前で話すことが、どんなにむずかしいかよくわかった。(生理的なこと、態度のこと、方法のことなど)
  - 5 友達がどんなことを考えているかよくわかる。
- などとなります。前述の作文指導の対象となった三年生が一年生であったときのことです。

以上のような過去をふまえて次のような目標を立てました。もち

るん二百五十人にもあまる生徒に、できるだけ短時間で効果をあげなくてはという思いも胸にありました。

1 話すことと書くことの関連に注目し、表現学習として、二つの単元を一体化する。

2 考える生活を身につけさせる。

3 文章構成法を適当にとり入れて、文章完成への過程（プロセス）を意識化させ、作文力の向上をはかる。

4 話すこと、聞くことの基本的な態度、方法を、経験させることとてつかませる。

## II 学習の実際

教科書、単元の位置・内容は次の通りです。  
単元の位置・内容（教科書）↓志賀直哉他編 高等学校現代国語一  
好学社

（順序）

- 詩と随筆 1 談話・討議・発表  
談話・討議・発表 7 ▽ 談話の味  
小説（一） 2 ▽ 討議と発表

内藤 濯

## 作文への道 ①

### I 題材集め

- 1 見ること  
2 聞くこと  
3 読むこと  
4 すること  
5 尋ねること  
6 考えること

によって

イロハニホヘチトリヌ

不平や不満を感じたこと  
困ったこと  
おもしろいと思ったこと  
感心したこと  
ふしぎだと思ったこと  
美しいと思ったこと  
恐ろしいと思ったこと  
珍らしいと思ったこと  
ハツと心を打たれたこと

記録  
短歌と俳句

（参考）議筆法

大田 周夫

3

作文

読書

4

文章と個性

波多野完治

小説（二）

5

▽ 作文教室

論説

6

▽ 文章について

阿川 弘之

戯曲

7

（参考）文章について

阿川 弘之

言語

8

▽ 文章について

阿川 弘之

指導の対象は大楠高校三十九年度第一学年普通科イ組（55）・ロ組（55）・ハ組（55）・ニ組（55）、家政科（55）です。

それでは一生徒の作品を紹介しながら、学習過程を述べたいと思います。

### 1 題材集め

（59・12・22）

冬休みを前にした時間に、新学期から表現学習を行なうことを予告し、休み中一日一題ずつ題材を集めてくるように言って、プリント①を配りました。

1	1	1	1	1	1	12	12	12	12	12	12	12	(例)12	月	
6	5	4	3	2	1	31	30	29	28	27	26	25	21	日	
社	死	インドネシアの 国選脱退に思う		正	今年 の目標	この一年間	「愛と死を見つめて」 を見て	友	二宮金次郎の 像について	私	ある結婚	授	克	題	
会				月				情				業	己		
私は大人になりたくない。 大人の世界はうそや矛盾でいっぱいだから、できたら今のままでいい。	キョットのどがなつたと同時に私たちとおばあちゃんとは生と死とに別れた。すぐには実感として理解することができなかった。死は私たちのそばにいつもいるのだ。	新聞に、インドネシアは平和に逆行するつもりか？ス大統領に翻意を望むと書かれていた。私もそう思う。		気分を入れかえるのに良い機会であった。	今年こそはと毎年一月一日には考える。自分をよく知り自分に勝つよう努力しよう。	日本の国際的地位が向上したように思う。変化の多すぎた年だった。	私は「愛と死を見つめて」を見てすごく感動した。だが実さんという人はいやな人だと思う。美智子さんが気のどくだ。私は実さんへ、悪口をいっぱい書いた手紙を出してやりたいと思っ	真の友情というのが本当にあるのか？	こわすべきではない。像の表面をまねるのではなく、精神をまねるべきだと思う。	自分がいやである。高校生になって少し気が弱くなったような気がする。	私の近くのお姉さんが来月の三日に結婚する。姉さんはまだ嫌きたくないのだそうだが、気の強いの母と親類のおばあさんによって無理やりに行かされるのだそう。私だったら言いな	高校にはいって一番書いたのは始業式・終業式の日も授業を行なうということだ。ある先生がこう言われた。「これはこの学校の伝統です」と。		人生は自分とのたたかいの連続だとわたしは思います。(主題文)	メモ(題材・語句・文・あらすじ・構想・主題など)
6	1	3		6	6	3	1	6	3	6	2	4	6	分類	

2 主題・構想について (40・1・14)

新学期の第一時間目に、どんな題材を集めることができたかを発表し合ったあと、プリントにあるような注意をして、一つだけ選ばせました。

そして、選んだ題材で何を述べようとするのかをはっきり考えさせ、一文にまとめさせました。

次に自分の選んだ題材で、具体的にどんな題材があるのかを考え、箇条書きにさせました。もちろん、作品を書いた方がやりやすい生徒には、先に全体を書かせました。

そのあと、題材を整理することになりますが、これは家庭作業にして、この時間の後半は文章展開の例を紹介しました。

時間的順序、空間的順序、原因結果的順序、効果的順序など一般的な展開例を示したあと、プリント④にある二つの文章を紹介し、その構成を考えさせました。また、新聞のコラム欄の文章を読んで聞かせ、その構成を考えさせることも試みました。

作文への道 ②

Ⅰ 題材選択 集めた題材の中から、次の点に注意して一つ

選ぶ

- 1 自分が真に発表したいという意欲を感じるもの。
- 2 高校生に関心のあるもの。
- 3 一〇〇〇字以内にまとめられるもの。

「愛と死を見つめて」をみて

Ⅱ 主題決定 自分の選んだ題材で何を書こうとするのか、次

の点に注意しながら一文にまとめ。

- 1 何について書くのか、その中心を一つにしぼる。
- 2 明確にする。

○ 広いものから狭いものへと限定する。

○ 言いたくてたまらないこと、言わないではいられないことをはっきりと意識する。

人を信じることはすばらしいことだ。

Ⅳ 構想

A 題材メモー①のメモを参考にしながら書きたいことを箇条書きにする。

○ 信じるということはずばらしい。

○ 「愛と死を見つめて」を見て

○ 夫婦せんぎいを聞いて

○ スター1の結婚

○ みち子さんは幸せだった

○ 感動したところ

B 題材整理(アウトライ  
ン) | 1 という順序で書く  
くか符号をつけてまとめ  
る。

Ⅰ BA / 1 a / (2)(1) / (b)(a)

Ⅰ 「愛と死を見つめて」を見て

Ⅱ A 感動した部分

B みち子さんは幸せだ  
た

Ⅲ A スター1の結婚

B 夫婦せんぎいを聞いて

Ⅳ 信じるということはずば  
らしい。

作文への道 ③

▽ 構想の型 (文章例)

1 三段構成の場合

おばあさんの善意

電車に乗った。いつものくせでドアにもたれて立つ。すぐそばの座席に脚を掛けていたおばあさんが、「ここおいていますよ。」と、自分の隣を指さす。見ると、二十センチほどおいてある。いくら細身の私でもすわれそうにない。「ありがとうございます。」と言っておも立っている。「すわれますよ。」「はあ、でも皆さんにご迷惑をかけますから。」おばあさんの心持ちを喜ばしく思いながら、私ですわれば、あとの五人にきゆうくつな思いをさせることになるかと気が使い、引き続き立っていた。すると、おばあさんは、いよいよ親切心を出して自分がおいているほうに寄り「すわれますがな。」と三度目の催促である。

それでもすわらずにいることは、年寄りの善意を踏みしめることにもなるので、腰掛けた。掛けるというよりむしろおしりの一部をイスの端に接触させたと言ったほうがよいかもしれない。だから見た目にはきわめて不自然だろうし、本人だって立っている時よりも足や腹に力を入れなければならない。おまけに厭に止まるたびに乗ってくる人々は、「そんなにすわりたいかい？」といった目で私を見る。

私は、年寄りとともに暮したことはないが、年寄りと若い者との間で起きるいろいろのトラブルは、案外こうしたところから生じるのではないだろうか。おばあさんの善意は、私に対し

てだけのものであり、他の人に対して迷惑をかけるという判断はない。その上年寄り特有の強引さがある。こういうことが毎日の暮しの中でくり返されると、たとえ、善意から出発していても、お互いに理解しあえず衝突も起こるであろう。

(朝日新聞「ひととき」)

2 四段構成の場合

どうぞこへ

土曜日の午後、買い物があったので四条へ出かけた。いつもなら市バスを利用するのだが、その日は三条にも用事があったので、京都市バスで行くことにした。」

バスに乗ったところ、中は割にすいていた。ぼくは空席の片隅にすわった。ところがバスが停留所に止るごとにたくさんの方が乗ってきて立っている人もでてきた。そしてバスがある停留所に止った時、一人の白髪まじりのおばあさんが、小さな手に大きな荷物をかかえ、少し腰をかがめながら乗って来て、ぼくの前に立った。ぼくは、折りたたみのかき一本しか持っていない。荷物もないし若いんだから、席を譲ってあげなくては」はくはそう思って立とうとしたが、何か恥ずかしいような気がして立てなかった。」

その時である。隣りにすわっていた若い女の人が「どうぞこへ」といってさっと席を譲った。おばあさんはたいへんよるこんで、幾度も幾度もお礼を言った。ぼくはそれを見るときにたまれなくなった。回りの人全部の目が、ぼくをにらんでいるような気がした。にらまれて自分が小さくなるような気がした。顔をあげることができず、早く三条につけばよいと思っ

た。三条にバスが着いた時、ぼくは逃げるようにしてバスを降り、何かに追われているように走った。』

席を譲ろうとして恥ずかしくてできなかったのは、ぼくに勇氣がなかったからだと思う。ぼくがすなおでなかったからだと思う。おばあさんはうれしそうだった。女の人もうれしそうだった。ぼくだけが変にこだわったために、あのうれしそうなお持ちを味わうことができないでしまった。「どうぞここへ」のたった一言がいえなかったために、その日一日がつまらないものになってしまった。京都バスに乗って、ぼくはいい勉強をした。』

(高一男)

### 3 下書き

(40・1・18)

さて、下書きを書く段階ですが、書かせる前に、文章を書く上での一般的な注意をしました。このたびだけのことでなく、いつでも気をつけてほしいというつもりでプリント④⑤で説明したのです。○印のものを特に気をつけるように強調しました。

#### 作文への道 ④

Ⅳ 叙述 文章はわかりやすいということがたいせつです。

いつでも次の点に気をつけましょう。

- 1 文章の組み立て(構想)を自然なものにします。
- 2 文章の内容の要点(論点)をもらさないようにします。
- 3 中心になる事柄をはっきり表現し、読み手の注意を引きやすいところへ出します。
- 4 実例や事実をできるだけ多く入れます。
- 5 やさしく上品な口語体を使います。

⑥ わかりやすい語句を使います。

⑦ 現代かなづかいや、送りがなの規則や、外来語・外国語の表記の規則を守って書きます。

⑧ やさしい漢字を使います。

⑨ 一つ一つの文をなるべく短く書きます。

⑩ 一つの文には一つの事柄だけを入れるようにします。

⑪ 正しい形の文を書くようにします。

Ⅰ 「何がどうした。」の形

ロ 「何がなんだ。」の形

ハ 「何がなんだ。」の形

12 文の終わりをはっきり示します。

Ⅰ 書き手の断定……………である、だ、です

ロ 書き手の強い断定……………に違いない、にきまつてる

ハ 書き手の軽い断定……………と信ずる、と思う

ニ ありのままの述べ方……………である、だ、です

ホ 書き手の疑わしい断定……………かもしれない、らしい

ヘ 書き手の予想……………であろう、ではあるまいか

ト 世間が認めているという述べ方……………(話)だ

チ 定説の引用……………と言われている、とされている

リ 出所のあいまいな引用……………だそうだ、ということらしい

又 他人の意見……………が言った、と述べている

⑬ 文の中の単語の使い方をくふうします。

Ⅰ 単語のならば方は一定の順序に従います。副詞や形容詞をそれらが修飾する語句からあまり離しすぎると、ど

こへかかるか、わからなくなります。

- ロ 慣用句を切りはなして使いません。
- ハ 同じ事がらを表わす単語はみだりに変えません。
- ニ 同じ単語を示す文字はなるべく同じものを使います。
- ホ 代名詞はもつとも近くの語句を受けさせます。
- 14 文のなかの漢字とかなの割り合いに注意します。(漢字が三〇%ぐらいがよいでしょう。)
- ⑮ 文の長さをほどほどにします。(文の長さは、三十字から四十字ぐらいのところを目やすにする。)
- ⑯ 段落に統一をあたえるために、一つの事がらだけを述べるようにします。

### 作文への道 ⑤

- ⑩ 段落の中の文の並べ方を自然なものにし、必要な接続のコトバを忘れないようにします。
- よい段落の条件
- イ その段落のすべての文は、段落の全体が表わす考えと何らかの関係がなければなりません。
- ロ その段落の全体が表わす考えと関係のない文を入れなないようにします。
- ハ その段落の全体が表わす考え(中心思想)を述べた文(主題文)がはいっているのが普通です。
- ニ 主題文は主題文であることがよくわかる位置におくようにします。
- ホ 段落の中の文と文の並べ方は自然でなくてはなりません。
- へ それぞれの文を結びつける語句(接続のコトバ)は正

しく用いられていなければなりません。

- ⑰ 段落の長さをほどほどにします。(段落の長さを二百字から三百字ぐらいにします。)
- 19 くぎり符号(「まる」「てん」など)をなるべく多く使います。
- 20 引用の符号(「」『』( )など)をなるべく多く使います。
- 21 同じような事がらを書くときには、だらだらとつづけて書かないで簡潔書きにします。

### Ⅶ 表記記号

- 1 「。」句点(まる)
- 1 文の切れ目に用いる。
- 2 「:」こと「:」もの「:」ときなど列記する項目の終わりに用いる。
- 3 次のような場合には用いない。
  - イ 題目・標語その他簡単な語句を掲げる場合。
  - ロ 事物の名称だけを列記する場合。
  - ハ 言い切ったものを、「」で示さずに「と」で受ける場合。
  - ニ 疑問・質問の内容をあげる場合。
- 2 「、」読点(てん)
  - 1 文中で、語の切れ続きを明らかにする必要のあるところに用いる。
  - 2 次のような場合に用いてよい。
    - イ 主語を示す「は」「も」などのあと。

- 10 「!」感嘆符
- 9 「?」疑問符
- 8 ……点線(リーダー)  
省略・無言・気分の転換・余情などを示す場合。
- 7 ——極線(ダッシュ)  
説明(「すなわち」の意)・気分の転換・余情などを示す場合。
- 6 ( ) かつこ  
注記を加えたり、省略を示す場合。
- 5 『 』 二重かき  
「」(引用)の中で、さらに引用を示す場合。
- 4 「」かきかつこ  
1 会話・語句を引用する場合。  
2 特に注意を求めるとき語句をはきむ場合。
- 3 「・」なかてん(くろまる)  
1 単語を並列する場合。  
2 外国語・ローマ字・日付・時刻について、次のように用いる。  
例 ニュー・デイル N・H・K 昭和三六・九・一  
午後二・三〇
- 2 外国語・ローマ字・日付・時刻について、次のように用いる。
- 1 単語を並列する場合。
- 0 対等に並列する語句の間。  
ハ 文初におく接統詞・副詞などのあと。  
ニ 叙述に対して、限定を加えたり、条件をあげる語句のあと。

- 14 「々」の字点  
原則として用いない。
- 13 「くく」の字点  
1 二字のかなをくり返す場合。にこく、いろく  
2 三字以上にわたる場合、二字以上の漢語、横書きの場合には用いない。
- 12 「ゝ」一つ点  
1 かながきの一語の中で、同音をくり返す場合に用いる。  
あゝ、たゝみ  
2 次のような場合には用いない。かわいい、育てて、そののち
- 11 「々」同の字点
- 10 「!」感嘆符
- 9 「?」疑問符
- 8 ……点線(リーダー)  
省略・無言・気分の転換・余情などを示す場合。
- 7 ——極線(ダッシュ)  
説明(「すなわち」の意)・気分の転換・余情などを示す場合。
- 6 ( ) かつこ  
注記を加えたり、省略を示す場合。
- 5 『 』 二重かき  
「」(引用)の中で、さらに引用を示す場合。
- 4 「」かきかつこ  
1 会話・語句を引用する場合。  
2 特に注意を求めるとき語句をはきむ場合。
- 3 「・」なかてん(くろまる)  
1 単語を並列する場合。  
2 外国語・ローマ字・日付・時刻について、次のように用いる。  
例 ニュー・デイル N・H・K 昭和三六・九・一  
午後二・三〇
- 2 外国語・ローマ字・日付・時刻について、次のように用いる。
- 1 単語を並列する場合。
- 0 対等に並列する語句の間。  
ハ 文初におく接統詞・副詞などのあと。  
ニ 叙述に対して、限定を加えたり、条件をあげる語句のあと。

#### 4 推考(推敲)

(40・1・21)

下書きができたところで、推考する場合の基本的留意点をプリント⑥で説明しました。○印のものは特に強調したものです。そのあと、生徒の作品を例にして、共同校正しようと思ったのですが、準備できず、代りに入試問題を利用しました。

最後に清書についての注意をして、家庭作業にしました。

また、教科書の「作文教室」も読んでおくように言いました。

#### 作文への道 ⑥

#### Ⅷ 推考(推敲)

自分の述べたいことが正しく伝わるように適切な表現がな

されているか、と考えながら、くり返して読んでみる。声を  
出しても読んでみる。一字一句に注意して読む。時間を  
おいてまた読んでみる。

1 文章の中心となる考え(書きたいこと)がはっきり書い  
てあるか。

2 書き足りないところはないか。

3 よけいなことを書いてないか。

4 極端すぎる考え方や意見ではないか。

5 人をいやしめたり、読み手を不快にさせたりするところ  
はないか。

6 文章の組み立ては効果的か。

7 段落がはっきりと切つてあるか。

8 段落の長さは適当か。

9 書き初めと結びの文は効果的か。

10 文と文のつながりのおかしいところはないか。

11 主語と述語のかかり受けのびつたりしない文はないか。

12 長く続きすぎる文はないか。

13 「だ・である」体と「です・ます」体が混乱していない  
か。

14 ことばの選び方は適当か。

15 文字や句読点の使い方は正しいか。

16 全体として、読みやすさ、わかりやすさへの注意が払っ  
てあるか。

17 自分が読んで、おもしろいと思えるか。

18 人に訴える何かがあるか。

## K 潜書

推考したものを写し違いないように、しかも、ていねい  
に書くこと。

原稿用紙の書き方

1 題名は、第二行に、上に三字分ぐらいあけて書く。

2 学年・組・番号は、第三行に書く。

3 氏名は第四行に書く。下が二字くらいあくのがよい。

4 本文は第六行から書き出す。

5 書き出しは、必ず一字下げる。

6 段落が改まる時は、本文の書き出しと同様に一字下  
げて書く。

7 会話のことばには「」をつけ、なるべく行を改め、  
一字下げて書く。

8 「」・「。」・「、」・「?」・「!」などの符号  
はそれぞれ一字分当てる。

9 句読点が行の最後へきてはみ出す場合は、次行へ送ら  
ず、その行の下の欄外に打つ。

10 二枚以上になった時は、ナンバーをつける。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

題○○○○○○

○ しかし、あぶない様に見えるわりには、事故はすくなくない。  
い。それでも、運のわるい者がときどきけがをすることがあ  
ります。二三日前も、一年の女の子が、うしろから来たオー  
トバイにはねられて足を折り、入院したとゆうことだ。しか

も、その子は、チャント道の左側を正しく歩いていたのだから、けっしてオートバイの方がわるかったのだと思う。

○ この二つの方法は、どちらにしても、すぐに実行にかかれるはずだと思ふのに、いっこうそのヨウスが見えず、自動車の数はますますふえるばかりで、交通ジゴクは日に日にひどくなっていく様です。ぼくたちは、いつになったら、毎日安心して学校に通うことができるのでしょうか。

○ この様な日本の交通難について、いつか新聞でよんだのを覚えていたが、なんでも、東京や大阪の様な大都市では、一日平均何人も人が交通事故で死に、何十人もがけがをしているとのことだ。ことに、こどもが事故で死ぬリツは、どの病氣によるものよりも、低いくらいだ。これでは、ぼくたちが毎日安心して道を歩けないのもあたりまえだと思ふ。

○ 最後に、お願いします。政治家や役人のおじさんたちは、よく、ぼくたちの歩く道を安全にしてください。

○ ぼくたちは、毎日学校に通う道が、狭くておまけに歩道車道の区別もないのに、普通の自動車はもちろん、大型バス、トラック、オートバイなどが、ひっきりなしに、ものすごいスピードで走っています。ぼくたちは、そのなかをぬって、両側の家のノキシタをつたう様にして、やっと学校にたどりついて、ハッとします。

○ そこで、ぼくは、どうしたらこの交通難をカンワシ、事故を防ぐことができるかについて、いろいろ考えてみたが、けっきよは、つぎの二つの方法しかないと思う。一つは、交通規則を平気でやぶる運転手がすくない限り、歩道車道の区

別のない様な広い道を、自動車やオートバイがとつること  
を、セツタイにキンシすることです。もう一つの方法は、かな  
らずしも自動車やオートバイを走らせることが必要ならば、  
まず、道路を広げ、歩道車道の区別をモウけ、さらに、交  
通規則がチャンと守れる人だけに、運転を許すとゆうこと  
で、

右の文章は、小学生A君の作文の草稿である。一段落すつ  
別の紙に書き、机の上に置いてあったのが風にとはされて、  
順序が乱れてしまった。A君に代つて

問一、題をつけ（五字以内、漢字、仮名自由）

問二、段落の順序を正し（○内に順序を示す数字を入れる）

問三、思い出せなかったので片仮名書きにしてあった漢語の右  
に漢字をしるし、

問四、不完全、不適當な個所を、それぞれの右に、傍線を引い  
て添削し（正しい順序での最後の段落を除き「だ」文体に  
統一し、不適當な語、漢字、仮名づかいの誤りを、すべて  
にわたつて訂正する。）

問五、完成したその作文を、先生の立場に立つて、評せよ（五  
十字以内）

「愛と死を見つめて」を見て

一年一組十六番

江口 喜世美

人を信じる、何てすばらしい事であるう。現在の矛盾だらけの世の中で信じるということばは不用である。いや矛盾だらけの世の中だからこそ必要なことばなのかもしれない。信じるということば、ある事に関しての孤独の賭けだと私は思う。

人を信じることによって、生きる望みを持ち、互に励まし合って行った大島みち子さんと河野実さん。

なかでも一番良かったと思つたのはみち子さんの手紙を見て実さんが突だと気づいて大阪を訪された。そして実さんの感が当って、みち子さんは、自殺を決意していた。この場面を見て私は羨やましいと思つた。信じ合っていたからこそ敏感に相手の心も読みとれたのだと思うと同時に、こんなに完全に信じ合ひ心が通じ合う事が出来るのか疑つた。が事実なのだ。みち子さんが不治の病、こういう条件があつたから、こんな純粹な愛情が芽ばえ成長したのかもかもしれない。

不治の病という最悪の立場におかれながらも、実さんの愛を信じ、実さんのために少しでも長生きをと、祈りながら手術を何回も受けたみち子さんのいじらしさ。そんなみち子さんを励ましながら、なおも愛し続ける実さん。

こんな純粹な愛情に比べて、映画スターなどの結婚などいやらしくて見てはおれない。A氏B子さんといついに結婚かノ長すぎた

「愛と死を見つめて」を見て

一年一組十六番

江口 喜世美

『この物語を見て、最初に感じた事は、人を信じることは、なんとすばらしいのだろうということだ。現在の矛盾だらけの世の中で「信じる」という言葉は不用のようだ。だが矛盾だらけの世の中だからこそ必要な言葉なのかもしれない。信じるということは、ある事に関しての孤独の賭けだと私には思えた。』

『この物語のすべてに感動した。なかでも一番良かったと思つたのは、みち子さんの手紙を見て実さんが突だと気付いたところだ。急いで大阪を訪れた実さん。その実さんのカン通り、みち子さんは自殺を決意していた。この場面を見て、私はうらやましいと思つた。信じ合っていたからこそ敏感に相手の心も読みとれたのだと思うと同時に、こんなに完全に信じ合ひ心が通じ合うことができるのか疑問に思つた。が、事実なのだ。』

不治の病という最悪の立場におかれながらも、実さんの愛を信じ、実さんのために、少しでも長生きをと祈りながら、手術を何回も受けたみち子さんのいじらしさ。そんなみち子さんを励ましながら、なおも愛し続ける実さん。みち子さんが不治の病、こういう条件があつたから、こんなに信じ合ひ、純粹な愛情が芽ばえ、成長したのかもかもしれない。みち子さんは死んだけれども人を信じることは経験した。それは幸福であつたと思う。』

『こんな純粹な愛情にくらべて、映画スターと称する人々の結婚は

春ノC氏し子さん離婚の真相ノいくら自分を売り出すためだとはいえ、不純である。いくらインスタント時代だからといって、結婚して一年もたない内に離婚するということようなことは止めて欲しい。そんなのだったら最初から結婚しなければよかったのに。互に傷つくばかりだ。

又夫婦せんざいなどでよくあなた方はなぜ結婚なさいましたか。奥さんのどこが気に入りましたか、なんてな質問に、こんなに答えた人がいた。私はこれの目が気に入りました。大きくて美しく澄んだ目、これにひかれて結婚しました。冗談で言ったのかもしれないが、これが聞いて私はあほらしいと思った。こんな人を見ると人を信じるという事を知らずに結婚し、墓場への道をとぼと歩いて行く哀れな人だと思えてならない。

みち子さん、奥さんのように、友情が愛情に変化していく、こんな理想的な愛情、本当にすばらしい。自分の一生を賭けて、互に信じ合いながら、生と死とに別離したけれども二人ともきつと満足しているに違いない。私は人を信じると言うことは嫌だったが、これからは人を信じるよう努力しよう。人を信じることは素はらしいことだから。

##### 5 清書・反省・評価

(40・1・25 27)

家で清書できなかつた生徒がかなりいましたので、できていないものには続けさせ、できたものから、プリント⑦に従って作業を進めさせました。

まず、完成した作品を客観的にふりかえって読み返し、感想を書

いやらしくて見てはおれない。A氏B子さんといかに結婚？長すぎた春ノC氏し子さん離婚の真相ノ週刊誌がいろいろさわぎたてている。いくら自分を売り出すためとはいえ、不純である。いくらインスタント時代だからといって、結婚して一年もたないうちに別れてしまうようなインスタント結婚などやめて欲しい。そんな一時的なものだったら最初から結婚しなければいいのだ。おたがいに傷つくばかりだ。

また、夫婦せんざいで、奥さんのどこが気に入って結婚したかという質問に、次のように答えた人がいた。「私はこれの目が気に入りました。大きくて澄んだ目、これにひかれて結婚しました。」冗談で言ったのかもしれないが、これを聞いて私は、目と結婚したのかあほらしいと思った。こんな人を見ると、人を信じることを知らずに結婚し、墓場への道をとぼと歩いて行く哀れな人だと思われてならない。」

『みち子さん、奥さんのように、友情が愛情に変化していく。このような理想的な愛情、本当にすばらしいと思う。自分の一生を賭けて、たがいに信じ合いながら死別しなければならなかった二人。けれど二人ともきつと満足しているに違いない。』

私は人を信じるということは嫌だったが、これからは人を信じるよう努力しようと思う。人を信じることはすばらしいことだから。』

きます。

そこまでできたら友達と交換して読み合い、評価表に従って評価させます。評価意識を喚起するのが目的ですが、同時に書き手の反省の資料としても効果的です。見当違いの評価があればもちろん指導者が訂正してやります。友達作品を読み、評価が終わったら、

感想を書かせます。評価表に表わせないものを、そこに書かせるわけです。完成した生徒にはできるだけ多くの友達の作品を読ませるようにしました。また余裕のあるものには教科書の「文章について」を読ませました。

完成した作品は、作文への道①②をとじて提出させ、わたしの簡単な評をつけ加えて返します。

作文への道 ⑦

× 反省と評価

- 1 自分の作品をふりかえって、次の作業をしながら読み返してみる。
  - イ 意味段落の切れ目に赤色で『をつける。
  - ロ 文章の主題を最もよく示すと思う部分に赤線を引く。
  - ハ (できれば、各段落の重要な部分に……線を引く。)
- 2 作品を完成して感じたこと。

読みかえせば読み返すほど構成が変に思えるが書き返してしまつたあとなので仕方がないとあきらめた。

しかし、一つの作品を仕上げたことがとてもうれしく、文を書くことがおもしろくなつたので、これからもときどき書くと思う。

作文上達三条件

- 1 続けて書きましよう。
- 2 書いたものを大切にしましよう。
- 3 書いたなら、かならず、だれかに読んでもらいましよう。

友達の評価

		1	2	3
叙 述	1	文は正しいか。	○	
	2	文字・記号の使い方は正しいか。	○	
	3	文字は読みやすいか。	○	
構 成	4	適当な段落に切つてあるか。	○	
	5	話の運びは自然であるか。	○	
主 題	6	興味のある題材か。	○	
	7	何を述べているか、よくわかるか。	○	
全 体	8	心を動かされたか。	○	

友達の感想 (乗田恵美)

非常に感動しました。それは信ずることの美しさと尊さをとらえて書いてあるからだと思います。しかし、私はこの現実にあった悲劇について批評の声も聞きませんでした。

江口さんも、もう少し批判的な角度から見つめて書いていたらもっと良かったと思います。

なかつた・こうじの評

よくかきました。どんどん書き続けてください。メモのところでは乗田さんが言っているように批判的な見方をしていたのですね。その点からも書いてみなさい。

6 「文章と個性」を読む。

作文が完成したあと、六人の代表を選び、人前で話す注意をしました。「話すこと」の学習に進む前に、教科書の「文章と個性」を

(40・1・28)

読んで「書くこと」の学習のしめくりとしました。

7 スピーチ

(40・2・1)

さて「話すこと」の学習のために、プリント「発表をきく」を準備して、人前で話すための基本的な技術・態度への関心を喚起させました。もちろん多くの生徒は「聞く」学習にもなるわけで、評価

発表をきく

はなし上手はきき上手

しながら聞き、主題をつかむことに重点をおかせました。六人のスピーチをメモしながら聞き、それをもとに話し合いました。そのとき必要に応じて録音再生も利用しました。(次表は口組に対するわたしのメモです)

項目	話しかけた(自然でよくわかるか)		態度		主題(何が何だ 何がどんなだ)というのか 何がどうする	総合 よい話だったかどうか よいところ(その他気づき) ↓メモふう
	はつきりしているか	よくわかるか	自然であるか	よくわかるか		
江口 喜世美 「愛と死を見つめて」を見て	③ ④ 2 1	③ 2 1	③ ② 1	③ ② 1	○純粋な愛情へのあこがれ	③ ② 1 ○もっと話すように。 ○興味のある問題を正しく思考している。
住本 光雄 「統一世界の夢」	③ 2 1	③ 2 1	③ ② 1	③ ② 1	○世界を統一して平和にしたい	③ ② 1 ○おもしろい ○まじめに話すように
陶山 克己 「ホーム・ルームの向上」	③ 2 1	③ 2 1	③ ② 1	③ ② 1	○ホーム・ルームを向上させたい 協調性なし まともな話し合いの 議論討論がで きない から	③ ② 1 ○身近かな問題と前向きにとり くんだのがよい。 ○資料を確実に
小林 紀佐子 「病院生活」	③ ② 1	③ ② 1	③ ② 1	③ ② 1	○病院生活の状態	③ ② 1 ○話すように ○もう少し魅力的に
浜田 和雄 「マスコミ」	③ ② 1	③ 2 1	③ ② 1	③ ② 1	○ませたことを言わないようにし たい	③ ② 1 ○ユーモア ○真剣なのがよい
乗田 恵美 「運命と偶然」	③ 2 1	③ 2 1	③ ② 1	③ ② 1	○運命と偶然とは近い	③ ② 1 ○まじめでよい

生徒のスピーチに続いて、青年の主張全国大会入賞者のうち、「わたしの訴えたいこと」(佐々木美千子)「こんな仕事に一生を捧げたい」(小四郎丸等)の発表を聴かせ、メモをもとに感想を話し合いました。なぜこれらの発表がわたしたちを感動させるのかを一緒に考えて結びました。

また、最後に、人前で話すときの留意点について、基本的な心がけ、準備段階の注意、話すときの方法などをまとめて整理しました。

## 9 「談話の味」を読む

(40・2・5)

表現学習のしめくりとして、教科書の「談話の味」を読み、わたしたちの話しことばの生活を反省しました。

## ■ おわりに

学習を終って感じることは、「はじめに」で述べた過去の段階からいくらか発展していないということです。

ただ、そうであればなおさらのこと、用語表現学習の体系確立を急がなくてはならないという思いはついています。

わたしはわたしなりに効果的な表現学習を求めてがんばりたいと思います。

おわりに、この学習をするために多くの方々からご教示いただいたことを感謝し、明記することの省略をお許し願いたいと思います。

(広島国泰寺高校教諭)